

【新卒紹介】

4年制大学になり、早いもので11回生が社会で活躍してくれています。社会に貢献できる医療人を目指す新卒生からの報告をいただきました。新入りと呼ばれた日がセピア色に変わってしまった我々にも、当時を思い出させてくれる熱い意気込みが感じられます。後輩達のこれからの活躍に期待しています。

整形外科のスペシャリストになるために

東北北海道病院 伊藤 優大(大学11回生)

私は現在東北北海道病院で勤務しています。職場は主に整形外科が主体で、脊椎脊髄疾患・腰痛、股関節疾患・人工関節、肩関節疾患・鏡視下手術、手の障害と怪我、膝関節疾患・人工関節と各分野のスペシャリストが専門外来を担当しています。外来は1日平均350人以上の患者さんの往来があり、放射線部門は多い日で1日数百枚を撮影しています。

働き始めた頃は一般撮影だけを担当していました。私の勤務先では、各専門分野の医師によって撮り方が決まっています。大学の座学で学んだ方法以外にも初めて聞く方法が多々あり、覚えることが多く、身につけるために毎日自宅でも体を動かして覚えました。また、患者対応では、本院を利用するほとんどの方が高齢者で声の大きさや話すスピード、どう話したら適切な体位が取れるかなどに苦戦し、先輩方のようにスムーズに検査を進めることができませんでした。

それでも、自分のポジティブな性格を活かし、技師長や先輩の撮影している様子を目に焼きつけ、その撮影の補助をさせてもらうなど積極的に動いて行くうちに、自分の撮り方、検査の進め方が身につきました。

5月後半からはCT撮影、7月からはMRIと続き、9月からはオペ室業務も増えました。今では、先輩方のローテーションに加わり基本的に1人でこなしています。

今後は、救急当番や当直などが始まるため、スタッフに頼られるよう、撮影方法と臨機応変な対応方法をしっかりと勉強しています。

まだまだ分からないことや、できないことは多いですが毎日1つずつ目標を持ってこれからも仕事に全力を尽くしていきます。

就職1年目の私

大森整形外科リウマチ科 大澤 智也(大11回生)

私は本学卒業後、福井県福井市の大森整形外科リウマチ科に就職しました。私の所属する病院では整形外科・リウマチ科・内科・脳外科・リハビリテーション科があり、現在は3名の診療放射線技師が勤務しております。

病院の規模としては、病床数19床と比較的少なく、ほとんど手術後の患者さんの回復のために使用されています。病床数は少なくとも、当院は県内でも有数の高度な整形の手術を行うため、市外からも多くの患者さんが来院されます。普段の業務は主に一般撮影、CT、MRI、下肢エコー、術中イメージをしています。中でも人工関節と脊椎の手術が多く、特に人工関節の手術件数は北陸三県で毎年3位以内の実績があります。そして、この人工股関節の手術プランは私たち放射線技師が担っています。

学生時代を振り返ると、私の成績は良い方ではなく、国家試験前は勉強に追われる毎日でした。しかもコロナ禍の影響もあり、気の滅入る日々でした。しかし、友人と教え合いながら知識をお互いのものにしたり、息抜きに遊んだりしたのも今ではいい思い出です。また、水田先生はじめ多くの先生方にもお世話になり助けられ、国家試験を無事合格することができました。

就職後、私はすぐに一般撮影を担当しました。腰の悪い患者さんや、耳の聞こえない患者さんが多く、接遇の面や教科書通りの写真を撮ることが難しく悩むことがありました。しかし、先輩が京都医療科学大学の先輩であったこともあり、質問しやすく日々やさしく教えていただいています。

まだまだ先輩たちのようににはできませんが、段々と思いの通りの写真をとることができるようになってきました。

私はまだわからないことも多くのミスをすることもたくさんありますが、早く一人前になれるように勉強を続けていきたいと思っています。

最後に、私の大学生生活の4年間はとても楽しく、あっという間に過ぎていきました。在学生の方々にも大学生生活を充実させてほしいなと思います。

当直業務に入るようになりました

住友病院 河原林 紗也佳(大11回生)

私の学生時代はとにかく試験勉強に追われていた記憶が強いです。特に国家試験までの日々は思い出に残っています。新型コロナウイルス感染症による大学生生活の激変により、困惑することばかりでした。慣れないリモート授業、ソーシャルディスタンスを守った席の配置、無くなる行事など学生生活を謳歌できることが全くありませんでした。なかでも1番困ったことは、登校できても大学に残ることが出来なかったことと、登校できない日があることでした。それまで、大学ユーティリティで友人と勉強するという習慣だった私にとって、自宅での勉強は気が滅入ってしまい捗りませんでした。他の同級生も同じでした。そのうち、国家試験に向けて猛勉強をする頃には残れるように、なんとか取り計らってもらえました。勉強を教えあったり、勘違いしていた箇所を指摘して貰えたり、行き詰まったときに一緒に息抜きし励ましてくれる仲間がいなければ国家試験を乗り越えられませんでした。勉強や精神面で支えてくださった先生方、友人には感謝してもきれません。

私が現在勤めている一般財団法人住友病院(大阪)は病床数が499床、『信頼性の高い医療で社会に貢献』を理念としています。就職してすぐは緊張と不安ばかりで、周りの先輩方にも心配されていました。また、患者さんへの対応では上手く意思の疎通を図れないことも多く、自分から動くタイミングが分からず日夜苦悶していました。しかし、先輩方から見て学び、忙しいなかでも沢山指導してアドバイスをくださるお陰で、少しずつではありますが自信を持ってできる検査が増え、患者さんへの接し方も身に付けることができました。

一般撮影、ポータブル、CT、MRIと様々なモダリティの研修を半年間受け、10月からは当直業務に入るようになりました。

まだまだ失敗ばかりで、先輩方の偉大さを痛感するばかりですが、徐々に自分の成長を実感でき、充実した日々を送っています。支えとなる先輩方や家族、悩みを共有してくれる友人、そして何より患者さんのために、いち早く一人前の診療放射線技師になるための技術や知識を自分のものにできるよう精進して参ります。

診療放射線技師になって

静岡市立静岡病院 新聞 将史(大11回生)

私は現在静岡市立静岡病院に勤務しています。最初の1カ月は一般撮影を担当していました。診療放射線技師として業務を始めたばかりで、撮影した画像を確認してポジショニングやX線中心線などを振り返り、質を落とさないように心掛けていました。しかし、患者さんによっては体型などが様々で、ポジショニングも微妙に異なるなど思った以上に難しく、失敗を繰り返しました。何故うまくいかないか困っているときには、悩みを聞いてくれる職場の先輩方、友人が傍にいて撮影のコツを教えてくださいました。努力している内に、自分の思った通りの撮影が徐々にでき、うまく撮れたときはとても嬉しかったです。

5月になるとCT、ポータブル、手術室の透視撮影と様々なモダリティを担当するようになりなした。看護師や医師などの多職種の方と一緒に業務をする機会も増え、自分の役割や新しいモダリティの操作やポジショニングなど覚えることが沢山あり、あっという間に半年が過ぎてしまいました。いろいろなことを経験し、自信をもってこなせる量が増えてきました。

10月からは血管撮影も担当するようになりました。血管造影では医師が手技を円滑に行えるようサポートするのが主な仕事です。うまくサポートするために、手技の手順を覚え、今どの血管を見て次は何をするのかを把握していないといけません。しかし、先読みを実践することはとても難しいため、毎日覚えることを増やし、頑張っています。

大変なことばかりですが、日々少しずつ成長していることを実感し、充実した毎日を過ごしています。これからも常に向上心を持ち、一人前の技師として頼りにされるよう努力し続けたいと思います。

診療放射線技師になって

ちば県民保健予防財団 永田 拓磨(大11回生)

私は現在、ちば県民保健予防財団に勤務し、出張検診業務に従事しています。毎日、千葉県内の市町村・学校・事業所の検診を行っています。検診を受診する割合は減少傾向にあり、受診しなかった人の多くが、検診の時間がない、面倒だからといった理由でした。そのため、時間を割いて検診を受けている受診者がこれから受診離れしていかないよう、スムーズで快適な検査の提供に努めています。

私が主に行っている胸部 X 線撮影について、多くの方が単純で簡単な撮影だと思われるかもしれませんが、時には予定者数が 300 人以上いるため、時間に追われながらかつ正確に撮影しなければなりません。また、障害者福祉施設での検査では、介助を必要とする受診者がおり、施設の職員の方に協力をお願いして撮影します。受診者が長蛇の列で並ぶなか、正確に撮影しなければならない、といったプレッシャーのなかでの撮影は新人の私にはとても荷が重く苦戦しました。

12 月からは胃部 X 線撮影の研修が始まります。胃部 X 線撮影では短時間での検査が求められます。その中で異常部位を探し、場合によっては追加撮影を行わなければならないため、必要とされる技術、知識が多く困惑しています。参考書や DVD、過去の症例などを見て勉強していますが、実際に撮影を行ってみたいとわからない部分も多いため、早く撮影を経験してみたいです。初期の胃がんや小さな病変は描出しにくく発見は難しいですが、少しの変化でも見逃さず早期発見できるよう努力していきたいと思ひます。

先日「胸部検診を受けたことで病気を見つけることができた」といった方が検査を受けに来られました。病気の発見に貢献することができる仕事に就くことができたことと改めて実感したとともに、正確な画像を撮影しなければならないと気が引き締まりました。これからも初心を忘れることなく技術、知識の向上に努め、県民の皆様の健康を支援していきたいです。

就職してから思う事

安曇野赤十字病院 棚田 翔吾(大 11 回生)

私が 4 年生の時には、新型コロナウイルスが蔓延し、国家試験や就職活動などに大きく影響するのではないかと心配や不安で押しつぶされてしまいそうな時がありました。

国家試験が近くなつてからはだいぶコロナ禍も落ち着きが見えてきて、大学に通い友人とともに切磋琢磨することが出来、精神面でも勇気づけられました。対面講義が始まるまでは自宅待機だったため、完全に一人での戦いでした。しかし、そんな時にもめげずに頑張った経験が、技師になってから何事も諦めず、ミスしても振り返りもしっかり行いこれからの糧にしていこうという活力につながっています。そう考えると、これもまた一つの思い出だったなと感じます。

働き始めてからは、患者さん一人ひとりに合わせて撮影を行うことの難しさを痛感し、思うような作業、得たい画像にならないこともありました。出来ないことばかりでその度に落ち込む日々のなか、職場の先輩方が支えてくださり、アドバイスをもとに努力していくうちに、少しずつですが患者さんが安心して検査を受けることのできる環境を作れるようになりました。

就職してからはや半年、一般撮影やポータブルから、透視検査、CT、MRI と様々なモダリティを経験させていただき、11 月からは当直業務に入るようになりました。通常の業務にも通じますが、救急時の患者さんは型どおりの撮影とはいかずとっさの判断力を求められ、医師の求めている画像を得るために常に先々まで見越して動く必要があります。私はまだ臨床の知識が浅く、患者さんの状態に合わせた気の利いたような撮影を行い、また、先輩方のように安全かつ迅速に検査を行うことに苦戦する日々が続いております。

このように失敗続きの日々ですが、その一つひとつの失敗を成長の糧にし、患者さんや周囲の方々から信頼していただけるように今後も努めていきたいと思ひます。

以上